



兄貴分の石橋守騎手から右手をつかまれ、高々と空に向けて上げられた



レース終了後、表彰式にてインタビューを受ける武騎手。この日の小倉競馬場はG1レース並みの観客が殺到した

Y.Kunihiro

父である武邦彦調教師から花束を受け取り、握手を交わす。武邦彦調教師は騎手時代1163勝を上げた名手でもある。この記録更新は感慨深いものがあるのだろう

F.Nakao

はいつも難産なので、案外来週まで持ち越されるかもしれません」と苦笑した。また、調教師席脇のマスコミ関係者の控え所では、臨時取材証を首から下げた男が、「まだひとつしか勝っていないので、今日は難しそうですね……」などと携帯電話で話している。最多勝利記録に向けた勝ち鞍は減って

いく数字ではないし、イチローの年間200安打のように限られた機会のうちには到達しなければならぬものでもない。乗りつづけている限り、いつかは達成できるのだから、記録を更新するのは別にこの日でもなくても構わないのだ。にもかかわらず、この日、小倉競馬場を訪れた者はみな「武豊の最多勝利記録更新」という偉業達成の目撃者になろうとしていた。

そんななか、豊は、第8レースの3歳上500万下をビオオプザバンで勝ち、記録更新まであと2勝とした。私の取材目的が豊であることを知っている石橋守騎手が「お疲れさまです」と声をかけてくれた。そしてこう訊いた。「豊はあといくつで更新ですか?」「ふたつです」私が答えると、彼は何度か小さく頷いて、検量室へと戻って行った。

検量室前に行くと、武邦彦が立っていた。「おめでとー、さいます」と私が手を差し出すと、彼は、「ありがとー。みんな、豊のためにこうして来てくれて……」と、私の手を握り返しながら目を潤ませた。驚くほどやわらかな手だった。

検量室前に行くと、武邦彦が立っていた。「おめでとー、さいます」と私が手を差し出すと、彼は、「ありがとー。みんな、豊のためにこうして来てくれて……」と、私の手を握り返しながら目を潤ませた。驚くほどやわらかな手だった。

第9レースは障害の小倉サマージャンプだったので「武豊劇場」は小休止。残るは第10、11、12の3レース。あとひとつで岡部の記録に並び、ふたつで更新する。誰が決めたわけでもないのだが、「リミットは最終レース」となった感じで、場内全体が本格的な「カウントダウンモード」に突入した。

第10レースの西日本スポーツ杯は11着に敗れたが、第11レースの指宿特別を下ラベルシチーで逃げ切り、岡部の記録に並んだ。その口取り撮影を済ませ、検量室に小走りして戻ると、ズラリと並んだカメラの列を見て、豊は、「すこいね」と笑った。大きな緊張感のすぐ隣にある笑顔。こんな表情もずいぶん久しぶりに見たような気がする。

検量室前に行くと、武邦彦が立っていた。「おめでとー、さいます」と私が手を差し出すと、彼は、「ありがとー。みんな、豊のためにこうして来てくれて……」と、私の手を握り返しながら目を潤ませた。驚くほどやわらかな手だった。

この「2944勝」は、単なる通過点ではなく、王貞治がハンク・アーロンの通算本塁打記録を抜いた「756号」と同じように、特別な重みを持つ数字である。2007年7月21日、小倉競馬場で見られた武豊や武邦彦、石橋守らの表情とともに、その数字は永く私たちの記憶にとどまることだろう。

ウィナーズサークルで表彰式が行われた。邦彦が豊に花束を渡すと、スタンドから大きな拍手が沸き起こった。「ダービーを勝った調教師みいだな」邦彦は、嬉しそうにつぶやいた。いつのまにか、豊の後方には大勢の騎手仲間が控えていた。外をぐるりと囲むファンから「胴上げ」という声があったのを各団に、豊は仲間たちに胴上げされ、3度、4度と宙を舞った。地面に降り立った豊の右手を石橋守がつかみ、空に向けて力強く突き上げた。

今年38歳になった豊にとつて、これが1万4104戦目、デビューから20年4カ月。岡部幸雄が58歳のとき、37年10カ月かけて到達した記録を塗り替えた。ゴールしてからガッツポーズがなかったのは、岡部に対する配慮だろう。「あの岡部さんの生涯の勝ち鞍に並び、そして超えたというのは、すごく誇れることだと思います。ただ、これでいいわけではなく、まだまだという気持ちもあります。ますます自分を磨いて、もっといいジョッキーになりたいですね」



武豊騎手 JRA最多勝利記録を 達成!

~岡部幸雄元騎手が持つ2943勝を20年4カ月で更新~

「下ドキュメント」21
21年目のカウントダウン

この日、小倉競馬場は朝から落ちつかない空気に包まれる。そして武騎手自身もこの日に記録を達成する強い気構えを感じさせた

島田明宏 - 文
text by Akhiro Shimada

ニューストンで勝ち、記録更新まであと3勝とした。が、検量室入口で囲み取材に応じた彼は笑顔はなかった。彼のコメントも、報道陣からの質問もこの新馬戦に関するものばかりで、最多勝について「やりとりはまったくなされない。それがかえって、彼の記録達成に対する強い気構えを感じさせた。豊がこれほど緊張感のある表情を見せたのは、デビューインバクトの引退レースとなった昨年の有馬記念以来ではないか。久しぶりに彼の「らしい」姿に接した気がして、私は、それだけで取材に来たよかったです。」

7月21日、土曜日。小倉競馬場は、朝からひどく落ちつかない、わざわざさした空気につまっていた。その中心にいたのは、岡部幸雄元騎手が持つ2943勝のJRA通算最多勝利記録更新まであと4勝といた武豊騎手だった。この日、豊の騎乗馬は11頭。彼がレース後、検量室前に戻ってくるたびに、百名近いメディアの人間が一斉にカメラやマイクを向け、彼が検量室内に入るとストップと控え所に戻る。土曜日の小倉にGI並みの報道陣というミスマッチが、豊の記録更新へのカウントダウンに対する注目度の高さを表していた。豊は、午前中のレースでは未勝利だったが、第4レースの2歳新馬戦をキンシ